日本の大学教育改革についての考察と提案

ドレーヴス　アンゲラ

前書き

日本では最近大学改革や教育の改善が非常に重要な話題で、盛んに議論されています。例えば日本の学生像をヨーロッパの視点から考察すると、確かに様々な改良すべきところがあると言えます。

以下に記述することは、初級ドイツ語も担当している私が個人として経験した事情に基づいてはいますが、初級ドイツ語は日本の大学で代表的な第二外国語であり、代表的な必修科目の一つであるとも言えますし、そしてもちろん私だけその悪条件で困っている訳でもないので、個人的な経験または初級ドイツ語授業事情を越えて、日本の大学教育が抱えている問題をなるべく代表的に扱うつもりです。

日本の大学で私が教えてきた時間は今まで合わせて四年間より少し上だけなので、この職業で私の先輩である方々がずっと経験をお持ちであることは当然ですが、人間が、ある事情に慣れると、それに気が付かなくなることは一般的に知られている事実です。私は、勤めてからすぐに、まだ新鮮な印象をそのまま書き続けておきましたので、生々しい記録を残すことができました。それは、問題対策を考えるために、無くてはならないことだと言えるでしょう。

日本の当り前は世界中で一般に有効だとお思いの日本の方が残念ながらまだ大勢いらっしゃいますが、それは間違って

います。当り前というのは文化によってかなり違います。外国人である私の日本についての知識はまだまだ不充分ですが、また一面で、視点や価値観は日本人とは違うので、日本の当り前に慣れ過ぎた日本人の見えなくなったことが外国人には見えるかも知れませんし、それぞれの状況に対する反応や、判断、結論はかなり日本人と違う可能性も充分あります。その違いは、例えば問題対策を練る時に、少なくとも刺激を与えて考えなおすきっかけになるという希望を、私は抱いています。少しでも私の第二の故国になった日本の役に立てば、幸いです。

目次

序説

Ⅰ　外国人教員から見た日本人学生像

一　モティヴェィションを持っていない学生

二　出席だけを考えて、授業中ぼうっとして寝ている学生

三　テストの時に勉強をあまりせずに、教育制度を信頼して何でも先生に任せておく学生

四　授業中反応してくれない、恐がっている学生

五　分からなくても、困っても、声をかけてくれない学生

六　勉強する時、単位のことしか考えていない学生

七　習ったことが使えない、つまり習っていることの実際的な意味を考えたことのない学生

八　暗誦することしかできない、会話とコミュニケーションの違いを知らない学生

九　大学そのものや勉強そのものなどの意味について考えたことのない学生

一〇　責任感を持っていない学生

Ⅱ　日本の学生像に関連している問題

一　問題のまとめ

二　第二外国語の悲劇

三　家庭教育の問題（いわゆる日本人らしさ）

(a)　甘えさせられている若者、そして照れる、人見知り、打ち解けないという現象

(b)　勉強を強制するあまり、子供の活発な興味を殺いでしまう親

四　ドイツ教育制度・自由の負担

五　ドイツの学生、またはドイツの大学の役割について

六　社会における大学の意味

七　結論としての改善提案

参考文献

序説

特に日本で教官として働き始めた頃、以下で述べる困った学生像の現象はすべて、ヨーロッパ出身である私にとっては極めて不思議で困ったことばかりでした。多くの同僚は日本人であるため、既にその現象に慣れ過ぎており、「そういうことだから仕方がない」と諦めたようなので、私がそういうふうな学生の態度を問題として扱っているのが不思議だと判

断なさるかも知れません。その訳は、その学生達には明らかに、自分の受けている教育がどんなに贅沢であるかという意識、つまり非常にお金がかかる長年の学校教育を受けられた上に更に大学に通うチャンスを与えられたという意識がないからですし、なおまた、せっかく必死に勉強で頑張ってやっと大学にまで来たので自分の力を生かそうという考え方が欠けていて、新しい勉強内容に関して元気な興味を持つということも全くないようなのです。つまり、勉強する意味・意義を全然分かっていない多くの日本の学生は、国際的な視点から見ますと、とても変で気の毒だとしか判断できません。しかし、それでただ「全てその学生達が悪い、やはり今の若い世代は困ったもんだ」という結論も間違っていると思います。なぜなら、それは表面的であり過ぎるからです。それは、ある病気の症状とその病気そのものを間違えることと同じです。つまり、例えば、激しい咳や高い熱が出る時は、その原因を丁寧に調べなければならないと思います。なぜなら、咳止めや熱さましなどで肺炎を直すことはできないからです。同じ様に、学生の困った態度は、いわゆる表面に現れてきた病症に過ぎないと考えるほうが適当だと私は思います。その態度の起こった原因を調べてゆけば、徐々に本来の問題が見えてくるに違いありません。本論の後段では、この学生像の原因となる問題のうち特に重要で根本的な事項を幾つか挙げておきますが、全てを網羅しているわけではありません。

I　外国人教員から見た日本人学生像

一　モティヴェィションを持っていない学生

日本の大学に着任してまず最初に一番驚き困ったのは、無関心で完全に消極的な態度で授業を受けている学生がいることでした。授業を受けているというよりただ在室していると言えるでしょう。必修科目の場合には、偶にそういうふうな学生がいても仕方がないと納得できますが、それが例外ではなく、極く普通なことだと分かった時、私はとても意外に思

い、困惑しました。

多くの学生にとっては、子供の時からずっと勉強ばかりさせられたので、勉強することは自分のやりたいことと違うし、もしかしたらその正反対でもあるかも知れません。何を勉強したいか、勉強したくないかとに拘わりなく、とにかく勉強しなければならないとずっと言われ続けた訳だけで勉強ばかりし、その結果として、文字通りの意味で受け身になった態度で大学までやってきます。その消極的な態度で教室に座り込み、仕方ないと諦めた、どうでも良いという顔さえする学生もいます。勉強することの面白さや楽しさを全然知らない学生は本当にかわいそうです。

モティヴェィションを持っていない学生に、少なくとも授業中にモティヴェィションを持たせるような工夫をしなければならないと私は思います。そうしないと、授業は、教員にとっても、学生にとっても、大変退屈となり、時間の無駄だけになるでしょう。ただし、授業中の対策だけでは、長い目で見ますと、とても不充分だと思われます。

二　出席だけを考えて、授業中ぼうっとして寝ている学生

毎回授業を受けていても、予習もせず授業中に発言もせず、何遍聞かれても ほとんど何もしなかった学生の一人が初めて私に声をかけた時には驚きました。「先生、今日は出席を取らないんですか。」ということでした。

授業中に寝ている学生を見たのも、日本へ来て初めて経験したことでした。非常に驚いて本当に信じられませんでした。怒ったことが、効いたのでしょうか、今では私の授業中に寝るほど無関心である学生はもういないようです。

ほとんど上達せずに毎回、じっと黙って教室に座っているだけで、つまり、出席をするだけで単位がもらえるというふうに思い込んでいる学生がかなりたくさんいます。この現象を引き起こす遠因の一つは、クラスの人数が非常に多過ぎるということです。この悪条件下では、出席を取った後で、講義形式の授業が行われ、試験の結果や出席があまり悪くなければ合格にするというシステムを取らざるを得なくなるという事態が起こります。

三　テストの時に勉強をあまりせずに、教育制度を信頼して何でも先生に任せておく学生

テストの時でさえ平気な顔をして、勉強をキチンとしなかったことを証明するためだけの答案を出す学生が非常に多いので驚いたことがあります。最後まで努力を特にしなくても何とか単位がもらえると思い込んでいる学生がよくいます。

必修科目は、仕方なく受けて、受からなければならないことだと学生はよく知っています。しかし、受かることのできなかった学生が多い場合には、つまり不合格率が高過ぎると、大学が次年度には受講生の人数で困るので、不合格率が最初から大体決まっているという事実も、学生はよく知っています。それで合格できたということは、十分な学力があるということを意味するわけではなく、合格者は単に最初から決まっている不合格者の割合の中に入らなかったことに過ぎません。そういうわけで、残念ながら、優秀な学生の才能を育てることではなく、平均的な学生が付いてゆけるようにすることが授業の目的になります。多くの学生はそういう事実を知っているので、ただ不合格にならない、最低程度の努力をしようとします。その結果として、大体の不熱心な学生の力に合わせて授業を進めなければならないので、優秀な学生は退屈のあまりに諦めてしまうこともありますし、とにもかくにも犠牲になります。なぜなら、興味・才能・やる気のある学生だけのクラスを作れば、二、三倍のスピードで上達できるはずだからです。集中コースを設けたことで既にその問題を解決したと主張する人もいるかも知れませんが、私は百パーセント賛成できません。ともかく必要な単位をなるべく早く片付けようとする学生も、そのつまらない理由だけで集中コースを受けることがあります。単位のためにだけ授業を受ける学生は、普通のコースにしても、集中コースにしても、他の学生が我慢して連れていかなければならない負担となっています。それなのに、無理やりに覚えさせられた知識を後になって実際に使える学生はあまりいないと言えます。なぜなら、最低ほどの努力でわずかの時間をかけて覚えた知識は、合格するために足りたとしても、本当を言えば、物足りないからです。やはりこの問題は、ドイツ語が必修科目でなくなるまで、解決できないと思われます。

四　授業中反応してくれない、恐がっている学生

どのクラスでも、発音練習に入る前に学生に発言練習させなければなりません。初めて「お隣の人とおしゃべりして下さい」というと、いつもあっという間に普通よりも静かになります。慣れるまでの最初の二ヶ月ぐらいは、学生が自分から声をかける自信がほとんど無いだけではなく、質問をされた時にも、正解を分かっている学生さえ反応してくれないこともあります。

一方的な授業に慣れさせられてきた学生は、自分の力や努力が必要であることを想像することさえできません。先生の話を付けっぱなしのテレビのニュースのように、ただチラッと聞き流すというような消極的な態度を取る学生が多くて、そういうふうな学生は、自分が質問された時に、驚きのあまりに頭の中が真っ白になってしまうようです。コミュニケーションの方法に慣れるまで、呼ばれた学生は、自分が当てられたことがとても信じられなくて、例えばクラスの中に小林という学生が一人しかいない場合にも、まん丸い目で私を見て、後ろを振り返って、そして、何が何だか分からないような顔をしながら、私をもの問いたげに見つめながら、自分を指差すことが極く普通にあります。そのように、いつもちゃんと宿題も予習もしている学生でも、聞かれて、びっくりするあまり、発言できなくなることがよくあります。これは学生を授業の主人公としない、これまでの授業法のせいであると思います。

大学だけではなく幼稚園から、殆どの日本の学生の一人一人が、自分が主人公になれるぐらいの余裕が授業中に与えられたことが無いそうです。

五　分からなくても、困っても、声をかけてくれない学生

多くの学生は、授業内容が自分の習いたいことではないので、分からなくても、説明してもらいたいという程の努力もしようとしません。それだけではなく、先生と学生の間に距離があり過ぎると思い、最初から諦めて、質問があっても訊

ねようともしない学生は少なくありません。学生が慣れてくるまで、反応さえしてくれないので、こちらとしては、その顔を見て、多分完全に理解できなかったところを当ててみて、何遍も「つまりですね」と説明してから、やっと分かったかどうか、質問してチェックするしかないのです。その上に、多くの学生は、質問が出せるほど自分で考えることに慣れていないので、質問の仕方も分からないし、自分の困っていることをはっきりと表現できません。まず最初に質問の方法を教えなければならない学生が大学にいるという事実は極めて不思議な現象だと思いました。年齢だけは既に大人であるはずなのに、思っていることを表現することも、必要な情報を適切に手に入れることもできません。この現象もやっぱり学生を中心にしない授業法のせいであると私は思います。

六　勉強する時、単位のことしか考えていない学生

皮肉な現象ですが、必修科目である授業を受ける学生の中で、テストの時普通よく頑張っているのは、残念ながらどうしても今この単位が必要である学生です。それは必ずしも一番優秀な学生であるわけではないので、授業内容について、または勉強することに関して興味を持ってもらうというのは、私のはかない夢なのでしょう。特にそういうふうな学生が、テストのわずか二週間後に、既に全てをまた忘れたとしても、私はもう驚きません。

自分が何を習いたいのか、何について興味を持っているか、何に向いているかに関係なく、その授業が必修科目であるために、単位を取らなければならないという理由だけで勉強する学生が多く、それでちょうど単位が取れるぐらい適当に勉強してくる学生が多いのは、残念ですが当然のことだと思われます。つまり、多くの学生にとっては本当は要らなくて欲しくもない知識を覚えさせることが現在の授業だと言えます。大衆教育の利点や利益も確かにあるに違いありませんが、優秀な学生とその才能は、この大衆化された教育の犠牲になっているように思います。

ところで、才能のある優秀な学生とは、ある特定の科目（例えばドイツ語）で優秀な成績を収める学生のことではなく、

自分が向いている分野に充分深い興味を持ち、勉強する意欲を持っている学生のことだと私は思います。例えば、ある学生は分野Aに向いていて、それをじっくりとしっかり勉強する気があるとします。しかし、あまり興味を持っていない分野Bの幾つの科目も勉強しなければなりません。すると、その勉強は少なくとも単位がもらえるぐらいの程度でなければならないので、それは明らかに力と時間を無駄に費やすことになります。結局、分野Aの勉強も、分野Bの勉強も、満足にできなくなります。そういう条件から頑張る気がわいてこないことは極めて当然です。結果として、多くの場合、学生は表面的で浅い知識を慌てて飲み込むしかないに違いありません。学生は何のために大学まで勉強ばかりして頑張ってきたか、何のために四年間を大学で過ごすか、日本の大学はその疑問に答えられるでしょうか。

そしてこの問題は、大学での勉強で初めて出てくることではありません。それ以前に長い年月をかけてしてきた受験勉強も、学生自身の適性とは無関係な分野を強制するという意味合いで、本来の目的に適っているとは言えません。その目的は、学生が人間として、有能な社会人として自分自身を発展させるということなので、却って、このような勉強は、受験生から貴重な時間や精力を奪ってしまうだけです。

日本の大学は、受験地獄を越えてきた学生のため、厳しい社会生活に入る前の休憩所であると何遍も耳にしました。しかし、単なる遊び場ならば、大学にはいるために長年をかけて勉強ばかりしてきたことは意味を失ってしまいます。なぜなら、それは学生が人間として発達するという大切な目的を助長するのではなく、却って、その障害とさえなる可能性が充分あるからです。

七　習ったことが使えない、つまり勉強することの実際的な意味を考えたことのない学生

日本の学生は、長年訓練されて、適当に覚えた知識を、その「目的」になる場面、つまり例えばテストの時に、大体ちゃんと持ち出せると言えますが、そういうふうな試験のために飲み込んだ知識が試験の時に吐き出せることを実力というの

は、変な間違いだと思います。一般に知られている現象ですが、多くの学生は、自分の覚えておいた知識を、それを使って試験に合格しても、実際の場面で有効に使うことができません。せっかく覚えた知識が実際に使えるものだということを、多くの学生は思ったこともありません。それは、覚えた知識を使う機会を用意してくれない、一方的な授業法に原因の一端があると思いますが、その不思議な現象とその様々な原因は奥深い話題ですので、それは後で詳しく論じるつもりです。とにかく、理論的に覚えた知識を実際に使いながら習うことが一番大切だと思います。なぜなら、ただ覚えたことと実際に習得したことは全く質が違うからです。それは、どんな勉強の場合でも変わらない事実ですし、誰でも確かめることができます。また、知識は財産ではないと、ここで主張したいと思います。例えば、授業で外国語を覚えても、実際に使わなければ、永久に使いものにならないし、そして、ある外国語が上手だった人でさえ、それをしばらく使わないと、使えなくなるのです。

他の科目でも、学生が自分の知識を使いながら、それは実際に役に立つものだと発見できると思いますが、外国語の場合でも、勉強してきた新しい表現を、授業中お互いに声をかけて練習させることは、学生にとっては極めて大事な経験になります。まず、お互いに外国語で話すのをおかしいと思って、笑いますが、本当に通じることだと分かって、とてもびっくりした様子を見せます。そして授業以外でも、習った表現を使って声をかけてくれる学生が段々増えてきます。また、コースメンバーがお互いに挨拶ぐらいをドイツ語で言うことも聞いたことがあります。もちろん、上に既に述べた通り、そういう発見は違う科目でも可能でしょうし、教官は授業中にそういうふうな経験ができる機会を学生に提供すべきだと思います。明日の社会を作る若者を大事にして、将来性のある教え方を考えなければならないと思います。

勉強するのは、テストや単位や先生などのためにではなく、勉強したことが実際に利益になることで、したがって、本来は、のちに使うために勉強することだと残念ながら多くの学生は考えたことも無いのです。

八　暗誦することしかできない、会話とコミュニケーションの違いを知らない学生

「会話なので、楽だ」と思い込んで、私の授業を受ける学生がまだ時々出てきます。大変な思い違いです。なぜなら、学生が会話をしながらコミュニケーション能力を身に付けて欲しいです。会話はコミュニケーションであると思うのは大変な間違いです。決まり文句や、場面によって決まったパターンを覚えておいて、その発音などを訓練することは確かに大事ですが、日常生活はＬＬ練習と違い、教科書通りにしゃべってくれる人間はいないので、会話を越える努力と能力が必要です。会話のためには、色々な表現を暗記や暗誦することだけで充分であるかも知れませんが、コミュニケーションできるためには、語彙や表現や文法などをしっかりと覚えておくことは単なる前提に過ぎません。しかし、その知識はそのままでは役に立ちません。例えばドイツ語を習いたいために人と話す訳ではなく、人と話したいのでドイツ語を習うのです。ある外国語ができるというのは、暗記した表現や文節を言えるという意味ではなく、自分の言いたいことや相手に聞きたいことなどを自分の母国語ではない言葉で表現できることですし、初めて行った外国で初対面の人とでも外国語を使って、必要な情報が取れる能力です。もちろん会話というしゃべる練習も大事ですが、外国語についての知識を生かす能力であるコミュニケーション能力を身に付けることが、周辺との情報交換のためにも人間関係のやり取りの場合でも、必要なのです。

単なる会話の練習に留まる授業に強い不満を覚えていますが、学生には通常それを越えるために必要な余裕がありません。必修科目があまりにも多過ぎるのではないでしょうか。そういう訳で、多くの学生は試験のためにしか勉強をしません。もう一つの理由は、ほとんどの学生は受験のためにの勉強にしか慣れていないからです。いわゆる受験地獄を通ってきた学生は驚くべきほど様々な知識を覚えましたが、教科書に書いてあることを鵜呑みにし、試験場まで持って来て、試験の時そのまま吐きだすことができるだけです。そのために、大学まで頑張ってきた学生は暗記することがとても上手ですが、生きた知識としては使えません。その知識に柔軟性が無く、固まっていて、繋がっていないですし、生きていませ

ん。その結果として、理論的な知識に優れた学生が、自分の知識を具体的に使えないことはよくあります。例えば、文法に非常に詳しい学生が簡単な文書さえ作れない現象です。それは、使える機会が無いからだけではありません。その理由については、上に述べ始めた通りに、もっと深く考えなければならないと思います。

九　大学そのものや勉強そのものなどの意味について考えたことのない学生

せっかく大学に来たのに授業中寝ている学生、またはコースを受けても、少なくとも単位がもらえるほども勉強しない学生は、一体、どうして大学に通っているのかと私はよく思いました。

受験地獄を通ってやっと大学に入ってきた学生は、勉強することが次の試験まで適当に試験範囲の知識を飲み込むことだと思い違いをしているようですし、勉強する目的は結局どこかの大学に入ることだったように思われますので、多くの学生にとっては、大学に入ったところで、勉強のために努力する必要性が無くなったように見えます。多くの日本の学生にとっては、大学は勉強あるいは研究をする所を意味しません。研究したい人はかなり少ないし、大学に入ってから具体的に何をしたいかをよく知らない学生が多いという印象を私は受けました。専門に関してあまり興味を持っていないが、評判が良いから、選んだということを学生からしばしば聞いたことがあります。普通の場合、つまり社会人になる場合には、大学で勉強したことを生かすチャンスが無いことがほとんどですし、そしてだいたい大学で勉強したことの内容より、大学や学部のレベルや評判が高く評価されます。そしてそれは、学生に自分の専門について関心を持たせることにはなりません。その結果として、大学に合格しただけで満足する学生は少なくありません。とにかく人生の厳しさに直面する前に、しばらくのんびりして遊びたいというのが学生の一般的な態度のようです。つまり、現在の日本の大学の多分一番大事な機能は、特に卒業の後で大学院に入らない大方の学生に於いては、卒業まで学生をしばらく自由にさせて、大学に入るまでほとんどできなかった色々な人生経験をさせることにあるように思われます。しかし、国際的な競争を考えますと、

それは大学の理想的な役割であるとはとても言えません。はっきりと言いますと、大学が遊び場であるのは、世界中で日本だけです。

一〇　責任感を持っていない学生

今まで教えたクラスの学生の三分の二は、日本でなく、ドイツならば、単位がもらえないだけではなく、最初からクラスに入れてさえもらえない、あるいはもうすぐ追い出されるかも知れない学生です。それは特に悪い学生であるというわけではなく、極く普通の日本の学生であると思われますが、自分から勉強を少しもしようとしないのが平均的な学生の態度のようで、とても困ります。もちろん困るのは私だけではありませんので、我々皆で将来の日本の社会や大学そのものの意味などに関してそろそろ考えなければならないのではないでしょうか。ただ単位の必要性に強制されて、好い加減に勉強をする学生を見ると、悲しくなります。学問というのは既に言葉だけの存在であり、もう現代日本の社会に不要なものになったのでしょうか。

入学試験で合格できただけではなく、ちゃんと授業料も払っているのですから、学生には教えてもらう権利があると言えます。しかし、学生は教えてもらえることが当り前だと思い込んでいるようなのに、本当に教えてもらいたいという学生は非常に少ないです。日本の学生は高額の授業料を何年間も親に払ってもらうことも当り前のことだと思い込んでいます。

日本の親は、他の子供と遊ぶ時間を奪い、受験地獄に駆りたてながら、他方ではすごく贅沢をさせて甘やかして育てます。そういう日本の二重底教育は様々な社会問題を起こすと私は思います。この主張の証拠になる色々な社会的な現象について二年間ぐらい調べてきましたが、これはとても広範な話題なので、今度のお話と関係のあることだけを挙げさせて頂きます。日本の子供と若者は、贅沢に慣らされる一方で、外から圧力をかけられすぎだという印象を受けました。一面

で親が、して欲しいことをしてもらうために、子供にずっと圧力をかけ、また一面で要るものや欲しがっている物以上を与えるという贅沢な暮らしをさせると、その子供の自己推進力が殺されてしまいますので、大人になっても、外から圧力をかけられていない時には、何もしようともしないのは、至極当然だと思います。無制限の甘さと、際限の無い厳しさの構造は、それに慣らされ続けた子供に於いて人間関係の希薄な世界を作り出し、まだ成長中の子供の性格に非常に危険な影響を与えると私は思います。自分から自分のために動き出す自己推進力が身に付くはずもないし、自分の仕事でだけ頑張る代償としてどんなに自分勝手で我儘でも、何でも許してもらうと思い込んでしまうし、自分だけが注目の中心であることに慣れてきた子供は思い遣りの無い大人になる可能性が十分にあります。若者に責任感を覚えさせないと、明日の社会は本当に恐いことになります。

Ⅱ　日本の学生像に関連している問題

一　問題のまとめ

この話題の中心となったのは多くの日本の学生の問題ですし、私が日本に教えにきて困った話ばかりです。上記の題をご覧になりますと、全部学生が悪いというふうに見えるかも知れませんが、実際にはそうではないことも今までの話で明らかになったと思います。学生の態度に困り、どうしてそういうふうな態度を取るのだろうかと考え、学生とよく話し合いますと、学生の困っている問題も段々分かってきます。その悪条件というのはとても複雑なことで、誰もすぐに解決できないはずですが、それを分析して色々な問題の根本をはっきりと認識することがとても大事で、まず最初にしなければならないステップだと私は思います。

簡単に解決できない理由は、様々な問題が複雑に関連しているからです。なるべく一流大学に入ることが学生の個人と

しての勉強の最終目的であるように見えますが、そうしたのは教育制度そのものではなく、教育制度を支える現代日本社会の期待でもあると思われます。しかし、社会の期待と個人の期待を区別しなければなりません。

なお、大学が、学生つまりその扶養者に高額な授業料を負担させることは良くないことだと思いますし、大学で教えてもらったことを後でほとんど使えないこと、つまり社会生活と大学生活がほとんど無関係の存在であることもとても良くないことだと言えるでしょう。更に、講義形式の授業方法だけで、学生の能動性を引き出さない教え方が悪いと言えますが、他方大き過ぎるクラスや学生の消極的な態度を変えるために、何もしようともしないで、結局諦めた先生側にも責任の一端があると思います。学生にとっては受験地獄の形を取る教育制度とか、親の自分の子供に対する行き過ぎた甘さと過剰な期待とかも、良くない影響を若者に与えると言えますが、親の心配することも分かりますし、大衆教育の利益や利点も確かにあるようです。とにかく、日本の大学は学問の行われる所であろうとするのか若者の遊び場であろうとするのか、どの方向に向かえば良いかなど、明日の日本の社会や国際化のことなどを意識しながら、これから具体的にどうすれば良いか真剣に考えなければなりません。

二　第二外国語の悲劇

日本では大学に入ってから第二外国語を勉強し始めるのが普通です。つまり、獨協や暁星を別にして、普通の中高学校では外国語として英語しか教えていません。それは日本人にとってはわざわざ述べるほどのこともない当り前な現実であるかも知れませんが、例えばドイツと比べてそれは日本教育の目立った特徴の一つであると言えます。なぜなら、ドイツでは大学に入るために無くてはならない資格（allgemeine Hochschulreife＝Abitur 合格）を得るために少なくとも二つの外国語の基本的な知識と能力が点数と年数で表された証明が必要であるからです。理由ももちろんあります。それは、ドイツの大学では直接に専門勉強に入るので、いろんな言葉で書かれた文献を読まなければなりませんので、無くてなら

ない能力であるからです。日本の大学では第二外国語は現在まで必修科目の一つなのに、多くの学生がそれを一体何のために習わなければならないか分からないのです。アンケートした多くの医学部生、歯学部生、農学部生、工学部生、法学部生の初級ドイツ語クラスの中では、法学生だけがドイツ語が自分の勉強のために役に立つと思うから第二外国語として選んだと答えました。日本の大学では、学生が第二外国語の利益と必要性を納得できる専門分野はまれです。重要な理由の一つだけですが、日本では普通の大学卒業まで四年間しか無いのに、その一年間で必修科目として覚えた第二外国語の知識は文献が読める能力に達しているとはとても言えませんし、教官が学生に第二外国語で文献を読むことを期待するのも例外だと言えます。つまり、実際に第二外国語を使う機会は大学でなかなかありませんし、使う機会を与えられても、一年間で第二外国語を、必修科目である訳だけでどうにか片付けた学生の能力は、あまりにも物足りないものなのです。

大学に通う人は、ちゃんと勉強できる前提として、第二外国語ぐらいを覚えるべきだと私は思います。ですから必修科目にすることに賛成ですが、しかし今の形では無意味だと思います。なぜなら、特に、第二外国語が実際に役に立つものになるために、日本での義務づけられた受講時間があまりにも足りないからです。なおまた、授業が大体日本語で行われていることは非常に外国語に慣れ難い環境だと言えます。そして、普通に日本で使われている第二外国語用の教材にも強い不満を覚えています。つまり、一年間、週二回九十分づつ、具体的な例文と練習問題のあまりにも無さ過ぎる教科書で、人数のとても多過ぎるクラスで一方的に教えられた学生に、その第二外国語での充分な能力が身に着くはずは最初から全くありません。ところで、第二外国語を大学に入る前に、つまり頭がまだ柔かいうちに、時間をかけて覚えるほうが、外国語そのものに慣れるためにも良いと思います。一つの外国語だけでは無理ですが、二つの外国語をじっくり覚え、しっかり訓練して、自分で使えるようになってからだと、外国語というものは何なのかということが少しづつ分かってきますし、外国語の覚え方も上手になります。二つの外国語を覚えることにより、頭の中でいわゆる外国語の構造が出来上がります。そのことも、外国語を覚え始めることが年を取れば取るほど難しくなることも、科学的に実証されています。

三　家庭教育の問題（いわゆる日本人らしさ）

(a)　甘えさせられている若者、そして照れ、人見知り、打ち解けないという現象

「あら、恥ずかしいの？照れてますね。」と小さい子供のよそよそしさを喜んでいる人を日本のどこでも毎日見掛けることができます。しかし、それは決して喜ぶことではないと私は思います。なぜなら、質問があっても、困っても、声をかけることが恥ずかしくてできないという大学一年生が多いからです。彼らは明らかに恥ずかしがることが普通で良い態度だと思い込んでいるようなので、元気を出し学生が自分自身のために頑張ってくれるまで随分訓練が必要ですし、授業中お互いに苦労しています。照れている小さい子供を誉めるつもりではなくとも、子供の恥ずかしがりようを喜んであげますと、必ずそれを励ます効果があります。多分多くの日本人には既に意識されなくなったことなのかも知れませんが、もちろんそういうふうな教育には歴史的な理由があります。日本では確かに昔から控え目で目立たない態度が美徳だと一般に思われただけではなく、社会の安定を守るために個人の自由を許さない縦社会の中で平和に暮らすためになくてはならなかった知恵でもありました。その歴史的な事実は現在の教育や教育問題に於いて、いろいろな形でまだ生き続けています。例えば「出る杭は打たれる」という諺もその名残だと言えますし、もしかしたらイジメの現象の一部さえそうなのかも知れないと私は思います。明らかに異国語に訳し難い「甘え」の構造にもそういうふうな歴史的な由来があります。控え目にすることなどと、どういうふうに繋がっているかと言いますと、甘えは、個人として比較的自由になるために人の陰に入り独立を諦める態度だと言えます。社会という概念は元々外来語として明治時代に輸入されたという事実が、例えばこのところではっきりと分かってきます。社会人の独立性というのが日本ではやはり自由という意味になりませんし、通じさえしないかも知れません。しかし、いつまでも自分自身のためにさえ責任を取らずに甘えている、そのほうが便利だからというので簡単に独立性を諦めてしまう現在日本の若者は国際的な競争で負けてしまう心配があります。

生き物としての人間の生長過程は世界中同じなので、もちろん例えばドイツの子供にも人見知りする時期があります。

しかし、子供の成長がそういう新しい段階に入ったということを分かっても、その喜びを子供に見せず、子供が自分からなるべく早く人見知りを卒業するように子供を励ますことはドイツでは普通の教育だと言えます。人見知りをすれば喜ばれるというふうに覚えてしまうと、子供は打ち解けない大人に成長する恐れがあります。しかし、多くの異国人と交流しなければならないヨーロッパではそういうふうな姿勢が必ず損になります。それまで言いますと、このところで「日本はヨーロッパなどと違うので、日本文化を守ろう」という人の出番でしょう。しかし、日本もこれから、家族や親友に囲まれた時だけ元気になる若者では困ると思われます。実は、私も日本の文化が大好きで、国際的な競争の中でも生き残って欲しいという訳で、このペーパーを書き、僭越ながら批判することにしました。活発で打ち解けた子供を育て、なるべく早めに独立させることはこれから日本の親や教師の一番大事な課題の一つであると私は思います。

(b) 勉強を強制するあまり、子供の活発な興味を殺いでしまう親

進学する子供のいる家庭では、日本の場合、教育が妙に勉強に集中している嫌いがあります。子供が勉強だけをちゃんとやってくれれば、面倒は全部親に任せて、やりたいことを好きなようにやっても良いという家庭が随分多いようです。その子供が甘えてしまい、そういうふうな状況が当り前なことだと思い込んでしまうのは当然としか言えません。しかし、そういうふうな環境の中では、責任感や思いやりなどはとても覚え難いので、驚くほど子供っぽい態度しか取れない大学生もいます。甘えている、ドイツの中学生ほど幼い学生が大勢います。結局、多くの親は、子供が大人になるために必要な教育や訓練を学校と大学に任せてしまうのです。しかし、大学が高校と同じような教育施設であるという考えに、ヨーロッパ人は同意できません。例えばドイツでは、せっかく大学まで進学して来た学生を教育する暇が全くありませんし、普通には必要でもないと言えます。なぜなら、大体の大学生は既に大人として独立しているからです。日本を除いて、大学は、学生が主体的に専門的な知識を身に付ける場所であり、授業によって一方的に知識を与えられる場所ではない、と

あらかじめ強調したいと思います。そして、その専門的な知識が基本的な知識をかなり越えていないと、大学から出た後の競争を考えれば、意味が無いと言えます。逆に言いますと、ドイツの大学卒業生には専門的な知識や能力が当り前なこととして期待されているのです。しかし、現在日本の普通の大学卒業生に専門的な知識を期待してみても、とても無理です。なぜなら、例えば普通のドイツの新入生は、何を専攻するかよく考えてきちんと決めてから、それを専門的に研究することにし、集中して頑張りますが、普通の日本の新入生は、最初からあまり考えずに取り敢えず言われていることだけを頭に入れ、もしかしたら卒業間際になってさえ、いわゆる自分の専門に目覚めないかも知れません。その独立性の全く無い勉強の仕方を見て、私は悲しくなります。日本の親は勉強を強制するあまり子供の旺盛な興味を殺いでしまうというのが、少しも言い過ぎではないのです。確かに、親が大金を払ってくれるのが当り前だと思い込んでしまうことは間違っていると言えますが、勉強とは大金を払ってくれる親のためにすることでもないのです。なんと言っても自分の人生なので、学生は自分のために頑張るべきだ、自分で自分の人生のために責任を取るべきだと私はここで強調したいのです。多くの日本の親がこれぐらいの独立さえ子供に許してあげないことを、私は本当に許せないと思います。特にそういうような親のせいで、日本の大学は「灰皿付きの幼稚園」に成り下がってしまうのです。(1)

四　ドイツの教育制度・自由の負担

ドイツの幼稚園では勉強はしませんし、入学試験も存在しません。もちろん様々なゲームや歌などで頭と体の訓練を行いますが、ドイツの幼稚園教育で一番注目されている中心点は日本と随分違います。それは、見守られつつ、同時に放任されて、子供達は一緒に遊んだり、歌ったりしながら、基本的な社会的な知恵を覚えておくことです。人間関係の作り方、喧嘩や仲直りの仕方、自分を主張することと自己保存、協力することと思い遣りなどの基礎を幼稚園でしっかりと身に付けます。そういうふうにのんびりと生長した子供は、六歳に達する頃に既に個人としても社会的存在としても確立して、

普通は他人を恐がらず、学校に通うことを楽しみにして待っています。それは、やっと年上の子供達と同じように、本を読んだり、自分の名前や手紙を書いたり、車の数などを数えたりすることを教えてもらえるという楽しみです。六歳になった前後、小学校にもう入っても良いか（Schulreife＝学熟）判断する時には、お医者さんも参加します。まだ幼過ぎる子供は、既に自分より成長している平均的な仲間達と一緒に学校に通っても苦労ばかりするのではなかろうかという恐れがあるからです。小学校の授業は朝早く（大体八時頃）始まりますが、お昼までだけです（長くとも午後一時半まで）。授業は四十五分のユニットで行われ、その間休憩がありますので、疲れやすい子供さえ最後まで集中しやすい制度だと言えます。お昼になって、子供達はご飯を食べに家に帰り、午後は自由です。しかし、自由というのは単なる暇ではありません。子供達は小学校の時、遊びと宿題に使える時間の配分を覚えなければなりません。もちろんドイツにも子供を強制的に勉強させる親がいますけれども、それは教育制度にとって必要なことではないのです。教育制度の基本的な原則は特に、全ての学生達に出発点でなるべく同じチャンスを与えることです。それは具体的に例えば、ドイツのほとんどの学校は国立であり、授業料は税金で支払われること、つまり子供達が「無料」で授業を受けられることです。即ち学校教育を受けられるチャンスは親の収入とは関係ありません。そして、どのレベルでも、普通の場合、入学試験は存在せず、資格を得る最終試験は一番難しくて大切です。つまり、やってみるチャンスは誰にもありますが、積極的にしっかりと頑張らないと、最後に成功できません。そして、学校教育終了試験で得たそれぞれの資格はドイツ社会で一般的な基準として評価が定まっていますので、たとえ合格できたとしても、それがぎりぎりの点数ならば、低い評価しか与えられず、結局ずっと学校に通っていた時間を無駄にすることに近いです。

学校が充分に勉強をしなかった学生を合格させる必要はありません。その重要な理由が二つあります。一つは、学校側と学生側の間には直接の経済的な関係は存在しませんし、もう一つは、違う学習内容を用意する学校、又はもっと易しいレベルの勉強を前提として求める学校もたくさんの種類があります。つまり、どうしてもこの学校で無理なら、学生は学

校（つまり学習内容・レベル・目的など）を変えることができます。しかし、その選択をなるべく早い段階で意識的に責任を持ってすることは、可能なだけではなく、絶対に必要です。

五　ドイツの学生、またはドイツの大学の役割について

全てに於いてドイツの方が良いと主張するつもりはもちろんありませんし、ドイツでも大学や教育制度に様々な問題がありますが、やはり問題のあり方が違うので、比べてみると少しは役に立つかも知れません。

ドイツでは授業料がありません。それは授業が無料であるということではなく、国が国民の税金で払います。そのために大学と学生の間には財政的な相互依存関係がありません。勉強しない学生は先生に無視されたり、追い出されたりすることなどが可能ですし、いつまでもいても単位がもらえず、卒業もできませんが、それは学生個人の問題です。(2)

ドイツでは入学試験がありませんが、その代わりにかなり厳しい高校卒業試験（Abitur）があります。不合格になることもありますし、悪い成績だと大学入学は困難です。昔からあるNumerus Claususという制限制度が最近段々広がってきました。Numerus Claususというのは、大学や学部が要求する得点を決めることによる入学制限で、平均点の高い優秀なAbiturの成績を持っていない学生を最初から大学に受け入れないという制限制度です。それでもまだ、ドイツの大学に入るのは比較的簡単なことですけれども、出るのは逆にとても大変なことです。なぜなら、大学を出ることは、学業で成功することを意味します。つまり、卒業することと学位を取ることは、同じことを意味していて互いに切り離せません。しかも、かなり高い段階を要求されるので、それに達することさえできない学生がとてもたくさんいます。

学生は授業料を払う必要がありませんので、原則として、Abiturに受かった者は誰でも、自分の生活費ぐらいをかせげれば、大学で勉強することができます。大学に通っている多くの学生はアルバイトで自分の生活を少なくとも部分的に支えています。独立の生活を過ごしていますので、失敗したら、自分の問題だと分かっていて、大抵の学生は大学にも親

にも頼り切ることなく、自分の責任で生きています、つまり自分自身に対しても責任感を持っています。

ドイツの大学は学問や研究が行われている所だと言えます。大学で勉強することは、まだまだPrestige（名声）を得ることです。社会と大学の関係が密接ですし、社会あるいは経営者は大学を卒業した人に、さっそく使える専門的な知識を期待します。そういう専門的な知識を得るために、自発的な勉強・研究が必要です。そのために多くの学生は、授業を受ける時間よりも何倍の時間も図書館に籠って勉強しています。必修科目ももちろんありますが、どうしても取らなければならない単位の数は、日本ほど多くありませんし、色々なコースが用意されていますので、学生はできるだけ、自分が興味を持っている分野と少しでも関係があり、後でまた使える知識を用意できるコースを選びます。

学問が生きている所では、単位制度が無くても、学生が勉強しないという事態は起こりません。なおまた、例えば私が卒業したミュンヘン大学では、原則として講義の出席を取りませんし、つまり単位も与えません。それなのに、講義を聞きたい学生が座り場所に困るほどたくさん集まります。それが極く普通な現象であると強調したいです。

どんな特殊な分野であっても、興味を持っている学生がいますし、その学生の関心や積極的な態度に期待できますので、先生は、自分の研究しているテーマや内容を直接、講義やゼミで扱うことができます。学生の論文やレポートを自分の研究に役立てることもよくあります。聴講希望者が多過ぎると思われる講義やゼミの場合は、事前に面接または試験を行い、一人づつの聴講の許可を決定します。講義の場合さえも、単位が出ないのに、聴講の許可が必要だということを強調しておきたいと思います。

しかし、大学は専門家だけを作り出す世界ではありません。つまり、勉強や研究をすることは、止むを得ずしなければならないことではなく、自分の人生を豊かにするための特別なチャンスだと一般に考えられています。例えば、修士学位を取るためには、幅の広い専門が三つ必要ですし、多くの学生が自分の専門と違う、関心を持っている別の学部の講義にも参加します。

六　社会における大学の意味

これからの社会に於いての大学の意義や機能を考えなければなりません。現在の日本の大学は卒業まで主に、割に一般的な教養と基本的なレベルをあまり越えない専門知識を与える所だと言えます。日本の社会に於いてはそれで丁度いいという立場がもちろん取れますが、結果的にはそれでとにかく、少なくともヨーロッパとの交流が段々難しくなるだろうと思われます。なぜなら、ヨーロッパでも経済的な状況が厳しくなってきたために、就職の競争は以前よりも激しくなり、政府は養成・修業期間を削減する努力をし、学生に前よりもっと早く専門的な勉強をさせる傾向が出てきているからです。例えばドイツでは今まで入学許可を得るために十三年間学校に通わなければなりませんでしたが、最近それを十二年間に削減するかどうか激しく議論が戦わされています。そして、ドイツの政府は大学に通う期間を削減して限定するためにも既に様々な対策を講じているところです。勉強する期間が削減されると、勉強の内容をその必要性を考えて当然限定しなければなりません。しかし、何が、どういうふうに、どれほど必要であるかは、大学と社会の関係によって決まることなのです。ドイツでは専門的な知識や能力が大学卒業生に期待されていますので、その知識を限定された期間でも得るために、ドイツの大学生はこれから自分の専門と違う知識、つまり全体的に幅の広い知識を得ることを諦めなければならないことになるでしょう。それは良いことかどうかを別にして、ただ、日本やドイツの政府はいろいろな表面的に似ている節約措置を工夫していても、ドイツの大学は現在の日本の大学と全く逆の方向に向かっているようだと私はここで強調したいと思います。

外国人である私が軽率に論じるには重過ぎるテーマですが、日本の大学で教えている知識が実社会ですぐそのまま役に立つものでは無くなって来ていることは、否定できないと思います。このことは学生の立場から見ると、青春を全部使って勉強してきたことが、社会人になってから全く使えないということになります。いわば、大学教育が単なる贅沢品になってしまいますので、大学に入った後、多くの学生がもっと勉強することを時間を無駄にするだけだと思うようになること

は当然だと思います。これを放置すると、日本の大学は、日本社会で実際に使うことが無い、あるいは実生活とは関係の無い知識を教える所であるという評価、在学中はほとんど遊んでばかりいる学生に何流大生であったという証明書を売るだけの所だという評価を定着させてしまう恐れがあります。

勉強する目的は、ただ、できるだけ評判の良い、つまり入り難い大学に入ることだけなのではないことを子供にも学生にもしっかりと意識させなければ、日本の社会と学問はいつの日にか、離れ過ぎることになると思われます。若者に自分の狭い日常生活を越える関心を持たせないことは、日本文化の衰微あるいは自己破壊の始まりではないかと、私は心配しています。

七　結論としての改善提案

日本の家庭教育は大体、子供の勉強にだけ集中し、それ以外は甘過ぎるので、バランスがよく取れていなく、まだ成長中の性格に悪い影響を与えていると言えます。周知の通り、まだ学校に通っている日本の子供の自殺率がとても高いだけではなく、まだ毎年増加しています。その具体的な理由は多くの場合明らかになっていませんが、その子供の大抵が日常生活のストレスに対しての反発・絶望感を押さえ切れなくなったことは確かです。自殺にまで至らなくても、一体に何のために必死に勉強してきたかが分からない、はっきりした目的・希望のない学生が大勢で、日本社会の将来が心配です。活発で元気で独立性のある若者を育てるために、教育に於いては全面的に親のはっきりした「よし」と「だめ」が必要であると思いますし、勉強に於いては子供を自由にさせ、子供に自分自身で自分の将来の人生に関して責任感を持たせることが極めて大事であると私は思います。

大学生活を実のあるものにするために、授業の形式も変わらなければならないと思います。諦めずに学生を授業の主人公にする、学生を専門的にも相手にする、学生を専門的な勉強で励ます（発表会・学会参加、雑誌掲載等）ことが極めて

大事な対策だと思います。そうしないと、学生には自分の専門的な知識に関する自信ができるはずはありません。学生皆に発言と質問するチャンスを与えるために、人数が少なくて集中できるクラスは、特に外国語授業に於いて、成功の大事な前提であると言えます。なおまた、外国語は少なくとも授業時間の四分の三を、その外国語を用いて教えないと、学生がそれを積極的に使う能力に達するはずはありません。そして現在、第二外国語用に使われている教科書のほとんどは日本語を使い過ぎだと言えますし、説明が理論的・抽象的であり過ぎますし、例文と練習問題の面で物足りないとも言えます。専門の授業で国際的な記事などを教材にすることだけではなく、例えば外国人である専門家をインタビューや講演や議論のために招くのも望ましいと思われます。

既にⅡの二で述べた通り、第三外国語以上なら、別の話しですが、第二外国語を大学に入ってから覚えるのでは遅過ぎると思います。しかし、現実の条件を出発点にしなければならないので、少なくともその第二外国語をじっくり覚えてもらわないと、そしてそれを実際に使う目的が無いと、習う意味がありません。つまり、第二外国語を選択する場合には、一年次から少なくとも二年間週四回（なるべく毎日）その言葉の授業を受けることを義務にすべきだと思います。なぜなら、そうしないと、卒業前にその言葉で文献を読めるようになるはずはないからです。そして、実際に外国語での文献が使われている授業は日本の大学ではあまりにも無さすぎると思います。第一外国語（つまり現在では英語）での知識を実際に使う授業は一年次から、第二外国語の場合には遅くとも三年次から用意すべきだと思います。

現在日本ではまだ大学生としての存在と社会人としての存在の間にあるギャップが大き過ぎます。普通の大学卒業生は一般的なレベルをほんの少しだけ越える専門知識しか持っていませんので、それは普通の場合、就職する時には期待されていないのが現実です。しかし、これから例えば外国語で専門を勉強できる、つまり国際交流の場で、専門の面でも言葉の面でも自由で、自信を持っている活発な学生が出来上がりましたら、経営者側も大学での勉強内容に関して興味を持つことになるでしょう。

これからどういうふうな学生を育てるかと大学側が決定しなければなりません。大学を単なる学生の遊び場にしたくなければ、ちゃんと勉強するつもりの無い学生を受け入れないことしかありません。現在の条件では、受け入れる学生を丁寧に選ぶ面倒臭い作業が必要でしょうが、しばらくすれば、大学ではちゃんと頑張らないと付いてゆけないという評判ができ、遊びたいだけという学生は自然に来なくなると期待できます。

自由というのは自分勝手ではなく、自分自身に対する責任でもあると若者にしっかり覚えさせなければならないと私は思います。例えば、学生が、大学卒業は簡単にできる、自分の人生とあまり関係ないと思ってしまうのはいけないことだと思います。家庭教育に於いてだけではなく、大学教育に於いても、これからもっと学生を自由にさせる、自分自身のために責任を取らせることが必要です。社会がもっと卒業成績の内容や学生が達した専門的なレベルに関して注目することが望ましいので、大学関係者は社会と大学の連繋を考え直した上で、大学で勉強する専門と必修科目を実用的に纏めることが必要です。そして、まず必修科目の数を減らすことと、その上に、以前よりもっと自由な選択の可能性も、せっかく身に付いた知識を使って習う機会を用意する授業も、無くてはならない対策であると思われます。現在の日本の大学は今まで、学生達があまり早くから専門的な勉強と研究に走ることは望ましくないという立場を取っていましたが、明日の社会の柱に成れる、優秀な人材を育てるために、大学は幅の広い一般的な大衆教育だけを促進するよりも、優秀な学生がなるべく早く自分の才能や関心に目を覚ますことを励ますべき、つまりなるべく早い特殊化を助長すべきだと思われます。

以上に述べましたのは、ほとんど私の個人的な経験に基づいて論じただけで、まだ不完全なところが残っていますが、日本の大学改革のために役に立てば、幸せです。論文の校正で鯰越溢弘氏（新潟大学法学部教授、現学部長）と長谷川茂夫氏（鹿児島大学法文学部教授）にとてもお世話に成り、厚くお礼を申し上げます。

参考文献

・中根千枝・『縦社会の人間関係』講談社　一九九二
・土居健郎・『「甘え」の構造』弘文堂　一九九一
・Deutsches Hochschulrahmengesetz: http://www.th-darmstadt.de/fsmathe/hopo/HRG.20-8-97.html
・柳父章・『翻訳語成立事情』岩波書店　一九八二
・Bausch/Christ/Hüllen/Krumm (Hrsg.): Handbuch Fremdsprachenunterricht. (UTB für Wissenschaft: Grosse Reihe), Tübingen: Francke 1991 (2., unveränderte Auflage)
・Dr. Arno Kappler (編集)：『ドイツの実情』、翻訳：ドイツの実情研究会（浦和）、Braunschweig: Westermann 1998

註

（1）これは新潟大学で同僚であったシュテファン・フック氏の表現であり、ここで使わせて頂きます。

（2）最近になって、ドイツでも制限年数を越えて在籍している学生を強制的に退学させる制度ができましたが、それでも結果的に卒業できないことに変わりありませんので、このテーマについてここで詳しく論じることは、差し控えておきます。